

# QOL VIEW

クオール ビュー

多様な視点で捉える  
医療の今と未来

2026

NO.13

JULY

7

特集

## 外科医減少の流れを 止められるか



調 憲

一般社団法人日本消化器外科学会 理事長  
群馬大学 医学部長



伊藤 雅史

社会医療法人慈生会等潤病院  
理事長



佐藤 俊彦

医療法人社団NIDC  
理事長



藤井 努

富山大学 学術研究部医学系  
消化器・腫瘍・総合外科 教授

CONTENTS

### ●CHANGER

医療の新たなビジネスモデルを提示しながら 近未来に求められる「0次予防」を目指す

### ●FRONTIER REPORT 地域医療最前線

急性期医療から在宅・介護、看取りまで 切れ目なく「トータルヘルスケア」を貫く

# CHANGER

● 新たな医療のカタチや価値を追求する“変革者”を紹介

医療の新たなビジネスモデルを提示しながら  
近未来に求められる「0次予防」を目指す



## 佐藤 俊彦

医療法人社団NIDC 理事長

医療の新たなビジネスモデルを次々と打ち出してきた佐藤俊彦氏。1996年に国内初となる遠隔画像診断サービスを事業展開する有限会社ドクターネットを設立。翌年、宇都宮セントラルクリニックを開院すると、高度画像診断機器を軸に地域の画像診断センターとして、クリニックの新たなあり方を提示した。同クリニックでは、2003年に個人立としては国内初のPET・CTが導入され、同時に会員制のメディカルクラブの運営も開始している。そして、2023年春、東京都世田谷区にセントラルクリニック世田谷を開院し、佐藤氏が目指す「0次予防」の実践に注力していく構えだ。

1回の臨床検査で救われる「いのち」がある。



### 臨床検査事業

臨床検査 / 遺伝子検査 / 予防医学 / 治験検査



### 医療情報システム事業

電子カルテシステム販売・保守



### 関連事業

食品衛生検査 / 環境検査 / 歯科検査

臨床検査は健康な未来への道しるべ



バイオとシステムで医療に貢献します  
株式会社ビー・エム・エル  
https://www.bml.co.jp/

本社 〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-21-3 TEL.03-3350-0111 (代表) FAX.03-3350-1180  
BML総合研究所 〒350-1101 埼玉県川越市市場1361-1 TEL.049-232-3131 (代表) FAX.049-232-3132

日立製作所に直接電話し、もんじゅの技術者たちがPETに必要な放射性医薬品を合成するサイクロトロン製造や運用で活躍できることを提案したのです」と、佐藤氏は話す。これに関心を示した同社から、PET・CTとサイクロトロン事業に関する「実現可能性調査(Feasibility Study)」が提案された。宇都宮セ

ントラルクリニクもこれに参画することによって日立製作所からPET・CTをレンタルすることができ、個人立医療機関としては国内で初の導入事例となった。そして、PET・CTを核とした地域医療の高度画像診断センターと会員制メディカルクラブの併設という新たなビジネスモデルが構築されていく。



さとう としひこ

1985年、福島県立医科大学を卒業後、日本医科大学付属第一病院、獨協医科大学病院の放射線科、鷲谷病院(現・社会医療法人中山会鷲谷記念病院)副院長を経て、1995年に有限会社ドクターネットを設立。1997年に宇都宮セントラルクリニクを設立後は、数々の医療関連サービスで起業。2012年に野口記念インターナショナル画像診断クリニックを設立すると、その経営母体となる医療法人社団NIDCの理事長に就任。他にもNPO法人ピンクリボンつづのみや理事長、米國トーマスジェファーソン大学客員教授などを現職として務める。

を求めて籍を移したこともある。目標に向かって自ら積極的に動くことに躊躇がない。最新の機器を用いた放射線科医療の実践を積み重ねるなかで、その魅力をさらに体感した。「放射線科医療を一生続けたいと思いついた」と、佐藤氏は当時を振り返る。そうしたキャリアと共に、画像診断機器はCTからMRIへと進化を続けた。1997年に宇都宮セントラルクリニクを開院したところからは、米國でPET・CTの稼働が広がり、がんの早期発見に確かな成果が認められるようになる。自院での導入を目指した佐藤氏だったが、銀行からは融資を断られたという。しかし、ここでも佐藤氏は積極的に動く。同じ時期に、高速増殖炉「もんじゅ」の計画見直しを報じられていた。「開発を担っていた」日立製作所に直接電話し、もんじゅの技術者たちがPETに必要な放射性医薬品を合成するサイクロトロンの製造や運用で活躍できることを提案したのです」と、佐藤氏は話す。

多様な薬剤を活用した分子イメージング診療を  
2023年春には、東京都世田谷区にセントラルクリニク世田谷を開院。豪華な邸宅が立ち並び、その一面にデザイン性豊かなクリニクが建てられた。世田谷区はPETの空白地帯であり、予防医療や健康管理への関心が高い地域住民は、メディカルクラブとも親和性が高い層である。

はデフレから抜け出せない経営環境を強いられるのですから、自由診療に活路を見いだしたいと考える経営者は少なくないでしょう」と、佐藤氏は話す。ただし、高度画像診断機器の採算性を保険診療のみで得ることも十分可能だとして、「大事なのは連携する医療機関の信用を獲得すること。そのためには正確な診断と迅速な結果報告を心がけることです」と補足した。同クリニクにおいても機器の稼働状況は、連携に基づく保険診療とメディカルクラブや人間ドックによる自由診療の構成割合が「7:3」になっている。

「がん」(がん)、アミロイド(認知症)、PSMA(前立腺がん)などのPET検査が提供され、遺伝子治療の適応と効果判定に必須とされるFMT・PETの治験も進行中だ。これらの診断に基づく多様な治療と予防の歩を進めることが、佐藤氏が見据える「0次予防」につながっていく。「ムーンショット目標についても、『2』に対しては、当クリニクで蓄積する検査データを時系列でAIに読み込ませることによって、未病段階で疾患リスクを発見できるようになります。『7』については、各領域のスペシャリストが研究を進めています。その軸は炎症細胞除去療法にあります。私たちが実践している活性酸素の除去も同じ方向にあります」と佐藤氏。今後の展望に自信を見せている。



PET-CTは2台を装備。多様な薬剤を活用して、早期診断や予防医療が行われている

## 前例のない取り組みを生む 社会に対する複眼的な視野

医療のあり方に影響を与え得る要素は実に多様だ。社会環境と経済環境の変化、科学技術の進歩、それらに伴う人々の価値観の変化によっても、求められる医療の姿や提供可能な医療の姿は変化する。

需要の創出それ自体にチャレンジしてきた。高度画像機器を最大限に生かす。がんの早期発見に特化したクリニクの開設。放射線科医が不足しがちな臨床現場に対し、専門医による迅速で精度の高い読影を提供する遠隔画像診断サービスのスキーム化。予防的見地を重視し、最新の画像診断機器を活用した会員制メディカルクラブの設立。いずれの取り組みにおいても、佐藤氏は医療を取り巻く環境やそこで生じている課題、



ホスピタリティにあふれる外来・検査の待合スペース。スタッフの接客についてもホテルレベルの教育が行われている

さらにそれらを解消しうる科学技術のトレンドなどを広く視野に入れないから、新たな医療サービスをつくり上げることを重視してきた。そして現在、佐藤氏が目を向けているのは「0次予防」である。「0次予防」は、2006年にWHOが「primal prevention」という表現で提唱。疾患リスク自体が社会や生活環境に生じる前から、政策や環境整備、健康教育などで発症リスクを根本から減らす予防概念とされる。ただし、佐藤氏が「0次予防」に取り組む理由は、WHOによる提唱それ自体ではない。そこにもまた複眼的な視野がある。

「2018年に内閣府から『ムーンショット型研究開発制度』が発表され、10の目標が示されました。うち2項目は、医療に直接関係する内容です。4600億円もの公的資金が投入される計画ですから、実現可能性の高い、近未来の医療のあるべき姿がそこに明示されていると受け止めるべきです」と、佐藤氏は話す。

## 放射線科医としての目線から 目標に向かって積極的に動く

その2項目とは、「目標2・疾患の超早期予測・予防」と「目標7・健康不安なく100歳まで」で、WHOの提唱する「0次予防」と一致する部分が多い。「健康不安なく100歳まで生きるには、平均寿命と

健康寿命の乖離を縮小すると同時に、長寿化を実現する必要があります。そのためには死亡原因の1位であるがんを早期に見出し、確実に治療するだけでなく、がんのリスク因子に対して超早期からアプローチすることも求められます。認知症についても同じことが言えるでしょう」と話す佐藤氏は、すでに「0次予防」の提供体制を進めている。「がんをはじめとする多くの疾患の原因となっているのは活性酸素です。一方で、免疫については、ガンマデルタT細胞が加齢とともに減少し、80歳代以降ではほぼ消失します。つまり、免疫機能を高めながら活性酸素を限りなくゼロにすれば、さまざまな疾患の発症を防ぐことができ、それが『0次予防』のポイントです」と話し、こうした予防的医療もすでに実践されている。